



ア
ス
フ
ア
ル
ト
に
花
束
を

時
乃
真
帆

横断歩道の「通りゃんせ」のメロディが間もなく終わりを告げようとしている。

少年A「やっぺー、塾に遅れる」

少年B「お前がグズグズしてるからだろ」

「通りゃんせ」の最後の警告。

少年B「急げっ」

小走りに行く少年達の足音。

流れ出した車の走行音。

クラクションが鳴らされる。

マジ子「（絶叫）駄目ーっ！ 止まってーっ！」

急ブレーキ！

少年A「うわっ！」

運転手A「気をつけろ！ 危ねえだろ！」

少年達「……ごめんなさい」

走り出した車が遠ざかっていく。

少年B「ちえっ、怒鳴られちゃった」

少年A「お前さー、今俺のこと突き飛ばしただろ」

少年B「ちげーよ」

少年A「やったね、こうやってドーンって」

少年B「してねーって」

少年A「嘘つくなよな。こうやってこんとドーンって、見ろよ、ヒジすりむいただろ」

少年B「それ、魔女の仕業だ」

少年A「えーまさかー」

少年B「兄ちゃんに聞いたことある。この交差点には魔女が棲んでるって」

少年A「あ俺も聞いた、なんだっけ、えと、クレ、クル、クロ……なんとかの」

少年B「クロスロードの魔女」

少年A「それ！ うえーっ、おっかねー」

少年B「逃げる！　つかまったら何されるかわかんねーぞ！」

少年A・B「(悲鳴)」

遠ざかっていく少年達の足音。

天使「あーあ。マジ子ったらまた助けちゃってさ」

マジ子「だって、あの子まだ小学生だよ、子供だよ？　あんな小さいのに死んじゃうなんて可哀相じゃない」

天使「それが運命なんだもん、仕方ないじゃん」

マジ子「だけど頭くる！　助けてやったのに私のこと魔女、だなんて」

天使「(吹きだし)　魔女。あんたが魔女」

マジ子「笑うな！」

天使「はいはい。だけどき、これで当分あんたの番は巡ってこないよ。次の交通事故はと。

ああ、あと三十一日と六時間後ってこの天使手帳に書いてある。どうすんのさマジ子」

マジ子「……だって気がついたらドーンってあの子の背中押してて」

天使「人助けもいいけど。こんな事続けてるといつまでたってもアンタ成仏できないよ！」

マジ子「ああもう！　耳にタコ。その言葉は聞き飽きた」

天使「マジ子、まじめによく聞きな。あんたこの交差点で死んで何年になる？」

マジ子「えっと、ろく……」

天使「聞えない。何年？」

マジ子「六年です！」

天使「いばって言うな！」

マジ子「あんたが言えって言ったんでしょ」

天使「そう！　六年もここにいるのよ。こないだ入学した小学生が卒業して中学の制服着ようかって年月を、ここで、こうして交通事故で死んだこの交差点で、ふらふらふらふら。ちよつとはまじめに成仏しようって気はないの？」

マジ子「したいわよ、私だって。大体さ、次の交通事故の犠牲者が交代要員でこななければ私が成仏できないなんて勝手なルール、あんた達が決めただけ。そんなの死ぬまで知らなかったわよ」

天使「あら、私じゃないわよ、空の上のえらいお方が決めたルール」

マジ子「……そのえらいお方から派遣されてる天使が、そんなひと事みたいに」

天使「あ、今日から天使、じゃなくアンジェリーナって呼んでちょうだい」

マジ子「ア、アンジェリーナ？」

天使「そ。イタリア語で天使。たまには気分転換でもしなきゃやってらんないっしょ」

マジ子（M）「……この能天気なアンジェリーナと一緒に町外れの交差点に座り込んで六年の歳月が流れました。ええ、私がこの街で噂されるクロスロードの魔女。この交差点の魔女です」

天使「なあにがクロスロードの魔女。マ・ジ・子があんたの名前でしようが。ってマジ子って名前自体まじダサッ」

マジ子（M）「この口が悪いのは……信じられないかもしれませんが、私の成仏指南役の天使、なんです。魔女と天使でなんじゃそりや？　ですって？　私だって好きでここにいる訳じゃありません。聞いてもらえますか？　クロスロードの魔女と呼ばれるようになった私のちょっとだけ長い物語。もちろん六年前の雨の日から始まります」

雨が降っている。

電話の呼び出し音。

マジ子「あ、もしもし？　鈴木さん？　具合はどうですか？　随分学校休んでるから先生が心配して、クラス委員の私に様子見てきてくれって……うん、私も心配よ、だからこうして。今度の中間試験の範囲もお教えしたいし、あのね、先生からプリントもお預かりしてるんです。近くまで来てるの、今から鈴木さんのお家に……え、来るなって、あの、鈴木さん？　じゃあポストにこのプリントと先生からのお手紙を……あの、もしもし？　お前なんか来るな、ウザイって……ねえ、なにをそんなに怒って」

ガチャ切りされる電話。

テレフォンカードの返却音。

マジ子（M）「溜息」やれやれ。いつもこんな役回り。先生だって自分でくればいいものを『お前クラス委員だろ』のひと言で私にゼーんぶ押し付けて。クラス委員だって別に私が好きでなった訳じゃありません。誰もなり手がなくて、先生が困ったなあゝて顔してらっしゃるから、つい、その、仕方なく……気がついたら手を挙げてて」

雨の中、行き交う車の音。

マジ子「あーあ、もうこんな時間。とにかくプリントだけでも届けて早く帰らなきゃ」

『通りゃんせ』のメロディーが始まる。

マジ子（M）「信号が青に変わりました。私はいつものように右見て、左見て、もう一度右見て。足を一歩踏み出したその時です」

連打するクラクション。

急ブレーキの音。

マジ子（M）「目の前に飛び込んできた青い鉄の塊。最初は何かと思いました。ぐるぐるする頭でようやく、ああ、これはトラックだ、と思った次の瞬間」

猛烈な破壊音。

クラクションがただただ鳴り響く。

マジ子（M）「ぎゅっと閉じた目をようやくの思いで開くと。目の前には信号機に鼻先をめり込ませた青いトラックが、雨の中、煙を上げて止まっていました」

天使「あーあ、やっちゃった」

マジ子「え？」

使い魔「やっちゃまいやがったな」

マジ子（M）「さっきまで人の気配もなかったのに、いつの間にか私の傍らに黒ずくめのテカテカ光るスーツ姿の男と白いひらひらレースの、まるでネグリジェみたいなドレスに大きな羽を背中にしよった女性がいました……いい歳をして今時下手な学会会でもないような格好。混乱する頭の中にコスプレ？ という言葉が瞬間浮かびます」

天使「六月六日午後六時十六分三十秒、きっかり予定通りだね」

マジ子（パニック）あの、デンワ、早く救急車、えと警察？ あ、何番でしたっけ」

天使「あーあ、そんなに慌てないの」

マジ子「でも、事故ですよ、トラックの運転手さん、早く助けなきゃ。ねえ、おじさん、警察に、そうよー一〇番！」

使い魔「おじさんって……見えるんだ、俺らの姿。すごいねお嬢ちゃん。普通俺らが見え

ても、見えない信じないって人が多いんだけどな」

天使「俺らって一緒にしないでよね」

使い魔「仕様がなければ、善悪はいつも隣合わせってね」

マジ子「ゼン、アク？」

使い魔「そう。悪の代表、使い魔でーす」

天使「善いこと担当、天使でーすって、ちょっと漫才ごっこやってないで、早くその運転手連れてってよ」

使い魔「はいはい。んではいっちょガツーンと行って参りますか」

おどろおどろしい音楽。

マジ子（M）「悪の代表、と言った男は黒尽くめのスーツに黒いサングラス。古い映画に出てくる組関係の方のように見えました。やはりそれらしく肩を怒らせ、トラックに近づくと運転席から中年男を片手ひとつで連れ出します」

使い魔「こら、ワレなにさらしとんねん」

トラック運転手「お、お、お、俺？」

使い魔「うわ、くっさー、酒くさー。あ、なんやねん、こら、助手席に一升瓶？ あ、こっちは缶ビール……じゃなくて発泡酒か。あーあ、ぎょうさん呑んでもうて」

トラック運転手「ちが、違います。呑んでなんて」

使い魔「ええから。申し開きは閻魔さんの前でとーっぷり聞かせてもらうで」

トラック運転手「え、え、え、閻魔？」

使い魔「それではお嬢さん、お達者で……いやボン・ヴォヤージュ。良い旅立ちを」

天使「ちよっと！ ひとつ忘れてるんじゃないの？」

使い魔「あ、そっか。（豹変）こら運転手、ワレこのお嬢ちゃんに頭下げんかい」

トラック運転手「へ？ 頭？」

天使「そつよし、赤信号、その上飲酒運転で将来あるお嬢ちゃんの命を奪ったんだからね。

ゴメンナサイの一言くらい残していったらどうなの？」

トラック運転手「はあ、そんなら……すみませんでした」

使い魔「こらもつと心をこめて。死なせてゴメンナサイ、だろ」

トラック運転手「……し、死なせてゴメンナサイ」

使い魔「ンンまあ合格としとくか！ そしたらお嬢さん、今度こそボン・ヴォヤージュ！」
トラック運転手「（遠ざかっていく悲鳴）」

一陣の強い風！

空き缶が転がって。

マジ子「あのー……」

天使「ん？ どうした？」

マジ子「たった今、サラッと大事な事を聞いたような気がするんですけど」

天使「そりゃ最後の一言だもん、あんな男の謝罪でもさ、ゴメンナサイは軽かないわよ」

マジ子「いえ、その前の」

天使「その前？」

マジ子「ええ、確か死なせてゴメンナサイって」

天使「あ」

マジ子「あ？」

天使「やっぱ気づいてなかった？ どうりで冷静だと思ったわよ」

マジ子「あのもしかして私」

天使「うん、あれ見てごらん。トラックの下ぺしゃんこになってるのし力みたいなセーラー服。あれがあなた」

近づいてくるパトカーのサイレン。

マジ子（M）「サイレンの音と共に私の心臓 がドキドキと高鳴り……え？ してない、私

の心臓、ぴくとも動いてない！ 嘘！」

パトカーのサイレンが高まる！

急ブレーキ。

ドアから降りる幾人もの足音。

無線がけたたましい。

警官「はい、運転手は呼吸停止、心拍停止。強いアルコール反応あり。飲酒による危険運

転と見られます。被害者は……ああ、この制服は桜台高校のセーラー服ですね。は

い、こちらの少女も残念ながら生存反応ありません」

マジ子「あり、あり、ありませんって」

ばたんとパトカーのドアが閉まる。

エンジンスタート。

マジ子「ちょっと待って！ 私を連れて行かないで。だって私はここに……え？ あれも

私、でこれも私……一体どういこと？」

天使「あっちは死んでしまったあなたの体で。んでここにるのは魂のあんたって事よ」

マジ子「魂ってつまりは……幽霊？」

天使「ピンポン、よく出来ました」

木枯らしが吹き過ぎていく。

マジ子「あのピンポン！ で私の今が決められたのよね」

天使「いや、私が決めたわけじゃないし」

マジ子「(溜息) たった十七年、短かった私の人生」

天使「それよりマジ子、あんた本当にどうするつもり？ このまま一生いや死んでるから

一生とは言わないか……」

マジ子「ね、あの子、変じゃない？」

天使「またそうやって話をそらす！」

マジ子(M)「赤信号の横断歩道を待つ女の子が見えます。私と同じ桜台高校のセーラー服を着てぼんやりと立っているんですが」

天使「どうせ学校サボった女子高生ってとこでしょ」

マジ子「ううん、そんな風には見えない。第一あの子、この寒いのに靴も履かずに裸足だ

よ」

天使「やだ……ほんと。あ、ちょっとどこに行くのよマジ子！」

翼のはばたき。

マジ子(M)「胸騒ぎがします。私はここに住み着いてから背中に生えた翼を大きく広げ、彼女のもとへ急ぎます。だって思いつめた横顔、道路の真ん中、ただ一点を見つめて……ああ急がなきゃ」

ヘラ「……皆嫌いだ、あんた達があたしを嫌うなら、そうよ、この世からいなくなればいいんでしょ、だったら」

もうひとつの羽音が並ぶ。

天使「ちょっと、何よ急に」

マジ子「危ない、あの子」

天使「大丈夫よ、だって私の天使手帳には次の事故は三十三日と六時間後、いやもう五時間と二十……」

マジ子「(遮り) 事故じゃない、自殺する気よ」

天使「ああ、それじゃあこの手帳には記載されな……えええ？　自殺？」

マジ子「早く、急いで止めなきゃっ！」

天使「でも自殺はねえ、ちよっとジャンル違いだから、あんたの後継者にはなれないし」

マジ子「馬鹿なこと言わないで手伝ってよ！」

天使「ちよっ……マジ子ーッ！」

急降下するイメージ音。

ヘラ「お父さん、お母さん、ごめんなさい。先立つ不幸をお許し下さい……大丈夫、次のあのダンプカー、あれなら無事に轢いてくれる。(深呼吸) いい、いくわよ、いーちにーの、さー」

マジ子「ちよっと待ったっー！」

ダンプカーの轟音が通り過ぎていく。

天使「(咳き込んで) ひどい排気ガス」

ヘラ「……すごい、痛くない。死ぬってこんなに簡単だったんだ」

マジ子「ね、大丈夫？　怪我はない？」

ヘラ「(笑って) 大丈夫ですよ、怪我なんかしたって、どうせ死んじやったんだから関係ないし」

天使「ダメだこりゃ、どうするマジ子、この子頭でも打ったんじゃない？」

ヘラ「わ！　やっぱり天使っているんだ。すごーいピラピラの衣裳におっきい翼」

天使「ピラピラで悪かったわね」

ヘラ「……でもなんでこっちの天使はセーラー服？　しかも私と同じ桜台高校の制服？」

マジ子「あ、これには色々長い訳が」

ヘラ「でも嬉しいな、こんな私でも天国に行けるんだ」

マジ子「あの、ね。期待を裏切って悪いけど、あなた生きてるから」

ヘラ「嘘、だって死んだから、だからこうして天使が迎えにきてくれたんでしょ？」

マジ子「あと一歩でダンプにぶつかるとこで、私がドーンとね」

ヘラ「ドーンと突き飛ばしたーっ？　はあ？　なんで？　一体あんたになんの権利があったあたしが死ぬのを邪魔すんのよ！」

マジ子「もちろん今は私を恨むでしょう、でもね生きてれば絶対いいことがあるって」

天使「(声をひそめ) ちょっとマジ子」

マジ子「え?」

天使「(声をひそめ) この子、やばい」

マジ子「いや今はほら興奮してるから」

天使「じゃなくて。あたし達の姿がなんでこの子に見えんのよ」

マジ子「……そうだ、死んだ人間にしか見えないはず」

天使「でしょ?」

マジ子「私が助けたはずなのに、でも私達が見える……ねえ、一体どういふこと?」

天使「だから。この子の心が死んでるの」

マジ子「心が死んでる?」

天使「この世に未練なんかこれっぽっちもない。世の中全てに絶望してるって事なのよ!」

音楽。

マジ子(M)「……いじめでした」

とぼりと歩く足音。

ヘラ「最初はね仲良かったんだ。同じ中学から来た子は少なくて、だから逆にその少ない四人でグループになって」

マジ子「いつも一緒にいたんだ」

ヘラ子「そう。何をするのも一緒。教室の移動もお昼もトイレも」

天使「馬鹿馬鹿しい。トイレぐらいひとりで行けてーの」

マジ子「いいでしょ、一緒に行ってたって。天使にはわかんないの、こーゆー人間の女の子ルール」

天使「天使じゃなくてアンジェリーナ。忘れないで」

ヘラ「アンジェリーナ?」

天使「そう、アンジェリーナ。ついでに言えばこの子はマジ子」

マジ子「ちよっとやめてよそのあだ名!」

ヘラ「マジヨ? あんたが」

マジ子「いや、魔女じゃなくてね」

天使「いいじゃない、笑える。天使と魔女の組み合わせ、最高じゃない」

マジ子「なにが最高よ!」

天使「そうよ、大体この子はね天使なんかじゃない。元と言えばあんたのお仲間。人間

なんだから」

ヘラ「人間？」

マジ子「うん……六年前あの交差点で交通事故にあって。あなたと同じ桜台高校の帰り道だった」

ヘラ「それでセーラー服姿？」

マジ子「そう私の年齢はあの時の十七歳のままで止まってる」

ヘラ「分かった！ 突然の交通事故の恨みであんたはクロスロードのマジヨになったって訳ね！」

マジ子「違うってマジヨじゃなくて」

天使「で、あんたは？ 名前なんてーの？」

ヘラ「あたしは……ヘラでいいよ」

マジ子・天使「ヘラ？」

ヘラ「いつもヘラヘラ笑ってるから。だからよ。でも仕方ないよねえ。笑ってないとやってらんないもん」

鍵をあけドアを開く。

ヘラ「ただいまー……」

マジ子（M）「まだ真新しい一軒の家。でもこんな時間だと言っのに真っ暗です」

天使「ここ？ あんたの家」

ヘラ「そうよ」

マジ子「お家の方は？ 誰もいないの？」

ヘラ「パパは単身赴任、ママはファミレスで皿洗いのパート」

天使「ふーん。でもまあ、家まで無事に送ったということだ」

ヘラ「サヨナラ」

天使「さようなら。元気でね」

ドアが閉まる。

天使「さ、見届けたんだからこれにてお役御免。戻るわよ、私達の持ち場に」
マジ子「……うん」

翼を羽ばたかせ飛び立つ。

マジ子「ねえ！」

天使「なに？」

マジ子「大丈夫かな、あの子」

天使「平気よ、だって笑ってサヨナラって言ってたじゃない？」

へらの声「サヨナラ」

マジ子「うん……笑ってたけど」

へらの声「でも仕方ないよねえ、笑ってないとやってらんないもん」

マジ子「……私、へらのとに戻る！」

天使「ええ？ ちょっと何言ってるのよ。それでも私なんてこうやって持ち場を離れてるのがバレたら、職場放棄って」

マジ子「アンジェリーナは交差点の番人やってればいいでしょ。私へらんとに戻る！」

大きな翼が急旋回する。

天使「(OFFになりつつ) ちょっとーっ！ 何考えてんのよ、マジ子ーっ！」

マジ子(M)「胸騒ぎがします。サヨナラと言ったへらの笑顔を思い出します。確かに笑ってました。けどへらの目は何も映してなかった。空っぽの笑顔だったように私には思えて」

もうひとつの羽音が近づいてくる。

天使「(近づきつつ) ったくもう。いい加減にしてよね」

マジ子「止めても無駄よ、私は」

天使「私も一緒に行くって言ってるの」

マジ子「本当？ ありがとうっ！」

天使「一応あんたの成仏指南役だからね。こんな事で時間のロスしてる暇はないの。ほら、急いで」

二つの羽音が大きくなって。

時を刻む柱時計の音。

マジ子「ねえ、真っ暗だよ」

天使「いるわよ、さっき二階の窓に小さな灯りがついてたでしょ？ ほら、こっち」

マジ子（M）「背中の翼を小さくたたんで二階の部屋を目指します。リビングから聞こえる時計の音が、この家の静けさを強調しているようで……ヘラ、誰もいないこの家でずっと孤独と闘ってきたの？ たった十六歳のあなたが」

ヘラ「（OFFから小さなすすり泣き）」

マジ子「ヘラ……？」

ゆっくりとドアを開く。

マジ子（M）「そっとドアを開けました。まだセーラー服を着たままのヘラの背中が見えます。小さく震えているのが分かります。ヘラ、そんなに切ない声で泣いて」

ヘラ「もういいよね、沢山だね。もうあたし楽になってもいいでしょ？」

マジ子（M）「ヘラの右手にキラリと光るものが見えました。あれは……ナイフです！」

柱時計が十二時を打ち始める。
もみ合うマジ子とヘラ。

マジ子「駄目よ！ いけない！」

ヘラ「な……！ いやだ、離して」

マジ子「それだけは駄目、お願い、ナイフを捨ててちょうだい」

ヘラ「もう嫌なの！ こんな事が続くなんて……あたし耐えられない！」

マジ子「ねえ、簡単に諦めないで」

ヘラ「簡単なんかじゃない。ずっとずっと考えて、悩んで……あたしは死んだ方が楽になれるの！」

マジ子「そんな事ない。お願い、生きて！」

音をたててナイフが落ちる。

マジ子「(息荒く)死んでも楽にならないよ。頑張って生きようよ、きっと幸せになれるから!」

柱時計が十二時を打ち終えた。

天使「……ほら、泣かないのよマジ子。十二時の鐘が鳴ったわ。とりあえず一日は生き延びたってことよ」

マジ子「なに暢気な事……! 大体こんな大変な時にただぼーっと突っ立って見てるだけなんて! あんたそれでも天使なの?」

天使「規則第十五条第三項にあるの。天使不介入ってね」

マジ子「な、なによ、それ!」

天使「天使も使い魔も人の生き死にに立ち会うことは出来ても介入してはならない。それは人の運命、寿命を操作したものと見なされ、厳罰の対象となるの」

マジ子「そ、そんなの聞いたことない!」

天使「そりゃそうでしょ、あんたは天使じゃないもの」

マジ子「よくも冷静にそんな事が」

ヘラ「(笑い声)」

マジ子「……ヘラ?」

ヘラ「分かった、やめるよ」

マジ子「ヘラ……!」

ヘラ「あんた達のノリ突っ込み見てたら馬鹿馬鹿しくなった」

天使「ノリ突っ込みってあんたね」

マジ子「良かった」

天使「良かったってマジ子も」

ヘラ「その代り教えて」

マジ子「何を?」

ヘラ「生きてれば幸せになるんでしょ? それを証明してみせて」

マジ子「え……でも」

ヘラ「幸せになれるんなら生きてもいい。でももしマジョがそれを証明出来なければ」

マジ子「う、うん……出来なければ?」

ヘラ「あたしはやっぱ死ぬことにする」

マジ子「そんな!」

ヘラ「一日時間をあげる。あたしも今日が終わるまでは生き延びることにするから」

マジ子「……一日だなんて短すぎるわよ」

ヘラ「あたしはね、もう一日も一時間も一分一秒だってこの世にいたくないの! 一日の

二十四時間だって永遠に思えるぐらいなんだから！」

天使「(声をひそめて) マジ子、ここまできたら覚悟を決めてやんなさい」

マジ子「(声ひそめ) だってあんまり時間がなさ過ぎる」

天使「(声ひそめ) ヘラにはまだあたし達の姿が見えてるのよ。それがどういふ事か分かるでしょ」

マジ子「(声ひそめ) ……」の世の全てに絶望してるから」

天使「ザツツライト！」

ヘラ「なにこちゃこちゃ揉めてんのよ。出来ないなら出来ないって素直に」

マジ子「(遮り) やるわ。絶対に証明してみせる！」

天使「良く言った！」

ヘラ「分かった。マジヨの証明を楽しみにしてる」

マジ子「いや、だから私はマジヨじゃなくてマジ子！」

始業前の学生達のざわめき。

マジ子(M)「生きていくことの喜びを証明する羽目になった私は、ヘラと共に今日一日を過ごすことにしました。たった二十四時間、こんな短い持ち時間でなにが出るんでしょう……それにしても懐かしい。私は卒業することが出来なかった桜台高校。少し古びただけでちっとも変わっていません、私の母校は」

天使「なにニヤニヤ笑ってんのよ気持ち悪い」

マジ子「うるさい。天使不介入」

天使「……それよりさ、ほら、ヘラの様子見てこらんよ」

マジ子「あんなに肩に力が入って」

天使「地獄なんだよね、ヘラにとってこの学校っていう場所は」

マジ子「地獄……」

天使「ほんと、人間って下らない。自分と他人を差別して少しでも弱みを見せようもんなら、牙むき出して落とそうとする。少しでも自分を偉く見せようとしちゃってさ」

マジ子「そんなの偉くもなんともないのに」天使「そうよ。だけどね、大人のやること子供はなんでも真似すんの。戦争がいい例じゃない」

マジ子「ちよっと大袈裟すぎ」

天使「大袈裟でもなんでもないって。ほら、ヘラのそばに行ってやんなさいよ。早く人生の素晴らしさを教えてあげて」

マジ子「……でもどうすれば」

天使「あんたが言い出したんでしょ、ほら行った行った」

小走りに来る三人の足音。

めぐみ「おはよー、ヘラ。家政科の宿題やってきてくれた？」

ヘラ「め、めぐ……ごめんなさい、私」

ひかる「うそーっ、信じられない。今日課題の提出だって言うのに」

ヘラ「ひかる、だってあの」

まどか「ひかる、だって呼び捨て？」

ヘラ「まどか……」

めぐみ「めぐみ様、ひかる様、まどか様。ほら、復唱して」

ヘラ「……め、めぐみ様、ひかる様、まどか様」

マジ子（M）「おどおどと同じ歳のクラスメイトに接するヘラ。呼び名通りに何を言われてもヘラヘラと笑って……胸が締め付けられます。でももっと腹がたつのは他の生徒達がそんなヘラの様子を見て笑っていることです」

めぐみ「あーあ、やっぱりヘラって当てになんない。いい？ 放課後までに課題仕上げてね。でないと単位もらえないんだから」

ひかる「ほんと、最悪」

まどか「少しはあたし達の役に立ってちょうだいよ、ヘラちゃん」

始業のチャイムが鳴る。

がやがやと席に戻る生徒達。

教室の扉が開く。

生徒A「起立、礼、着席」

一斉に着席する生徒達。

だんだんとクラス内が静まって。

マジ子「なによあの子達ー！」

ヘラ「（声ひそめ）うるさい、黙ってて」

マジ子「ちよっと、何やってんのよ、裁縫箱なんて出して。今数学の授業」

ヘラ「（遮り）家政科の宿題、放課後までにやないと怒られちゃう」

マジ子「あんな子達の宿題なんてやる必要ないって」

ヘラ「うるさいっ……」

教師「うるさい？　なんだへラ、先生の授業がうるさいか」
めぐみ「ひっどーい、へラってば」

へラ「そ、そんな事ありません」
ひかる「うるさいなら静かなところで一人で自習でもしてたらどうですかー？」
まどか「それいいかも。目障りだし」

一斉に笑い声が起こる。

マジ子「なんなのあの子達！」

へラ「……すみません、ちょっと頭が痛くてその、保健室に行ってもいいですか？」

教師「保健室う？」

へラ「ごめんなさい、どうしても我慢できないんです」

教師「仕方ないな、おい、保健委員」

へラ「いいです、一人で行けますから」

小走りに行く足音。

ドアが閉まる。

めぐみ「(OFF)　へラのヤツ、絶対あれ仮病に決まってる」

ひかる「(OFF)　頭が痛くなるほどつまんなかったんじゃない？」

教師「(OFF)　ひどいなあ、そんなに先生の授業が退屈か？」

どつと沸く教室中の笑いから遠ざかる

ように足早に行く足音。

マジ子「ねえ、どこ行くの？　私の記憶では保健室は確かこっち」

へラ「茶道部の部室。あそこなら授業中は確実に人が来ないから」

マジ子「茶道部……懐かしいなあ、私部員だったんだよ、これでも」

へラ「あ、そう」

マジ子「って、ちょっと神聖な部室でなにする気よ？」

ドアが開く。

低く小鳥のさえずりが聞こえる。

マジ子(M)「少しばかり日当たりの悪い小さなお茶室。でも安普請ながらきちんと張り替

えられた白い障子紙、拭き清められた畳……ここが学校の中とは思えないような別世界です。心が落ち着きます。けれどヘラはそんなものを見る余裕もなく、ブツブツ呟きながら必死に針を動かしています」

ヘラ「……急がなきゃ、放課後まで間に合わない……どうしよう、ああ！」

マジ子「ねえ、今縫ってる浴衣、あの子達が言ってた家政科の宿題？」

ヘラ「うるさいな、気が散る……そうよ、本当なら今頃あたしはあの世に行ってる予定だったから最初っからアイツらが押し付けたこんな浴衣、縫ってやる気なんてなかった。なのにマジョ達が邪魔するから」

マジ子「だから。私はマジョじゃなくて」

ヘラ「だって皆言ってるよ、あの交差点にはマジョが棲んでる。通りかかった人間を突き飛ばして悪さをする、だから近寄るなって」

マジ子「やだ、違うわそれ、誤解よ誤解」

ヘラ「あたしそれを聞いた時ラッキーだと思った」

マジ子「え？」

ヘラ「クロスロードの魔女が確実に私をあの世に連れていってくれる。だから昨日あの交差点に行ったのに！ なによ、役立たず！」

マジ子「や、役立たずって言われても私……」

ヘラ「どうすればいいのよ、こんな三人分の浴衣なんて間に合いつこないじゃない」

マジ子「彼女達につき返せばいいでしょ？ 大体自分でやるのが学生の本分で」

ヘラ「偉そうに言わないでよ。いじめられるのはあたしなんだから。もう嫌、やってらんない！」

マジ子「ヘラ！」

茶碗を割る音。

次から次へと茶碗を割っていく。

マジ子「ちょっと何するのよ」

ヘラ「あたしが何したって言うの！ どんだけ悪いことをしたって言うのよ」

マジ子「やめなさい、それ、志野焼きの、顧問の先生が奮発した……あ、駄目、信楽焼きの上等なお抹茶茶碗が」

ヘラ「うるさい！ 皆壊れちゃえばいいんだ！」

乱暴にドアが開く。

サトケン「こらっ、何やってる!」

マジ子「あ、学年主任のサトケン。まだこの学校にいたんだあ」

ヘラ「校長先生……!」

マジ子「え? 校長? サトケンが? 偉くなっちゃって」

サトケン「お前、どこのクラスの生徒だ? 今授業中だろう。ほら、おとなしくこっちに

来なさい」

ヘラ「来るな!」

サトケン「うわっ!」

体がぶつかる!

逃げ出していく足音。

サトケン「(OFFになりながら) こら待て、待ちなさい!」

追いかける足音が続く。

マジ子(M)「ヘラ、泣きながら茶室を飛び出したヘラ……全速力で廊下を駆け抜けていったヘラ。もう姿が見えません。どうしよう、どこに行ったの? まさか、またあの交差点に」

大きな羽音が聞こえる。

天使「マジ子、こっち!」

マジ子「天使、あなたいつの間に」

天使「だからアンジェリーナだってば。ほら行くわよ、ヘラのとこに」

マジ子「だって天使不介入って」

天使「マジ子一人じゃラチあかないでしょ。ほら早く翼を出して」

マジ子「翼?」

天使「ヘラは校舎の屋上に向かったわ」

マジ子「なんですって!」

吹きすさぶ風。

マジ子(M)「私達は翼が千切れるかと思うほど急いで校舎の屋上へと向かいました。吹きおろすひどい風です。何度も後ろへと押し流れそうで……ようやくたどり着いた屋上には、手すりに乗り出したヘラがいました」

天使「どうやら間に合ったみたいね」

マジ子「ヘラ、こっちに来て、ほら私の手につかまって」

ヘラ「来ないでよ、役立たずのマジヨなんてどっか行っちゃってよ！」

マジ子「ヘラ！」

天使「笑って」あんた、すっかり魔女にされてる。しかも役立たずだって」

ヘラ「こんな時にふざけないで」

天使「だったら役にたってみなさいよ。ほら、マジ子！」

マジ子（M）「むらむらと怒りが湧き起ってきました。クロスロードのマジヨ？　しかも

役立たず？　私だって好きで死んだ訳じゃありません！」

ばさり、とひと際大きな羽音。

ヘラ「な、なによ、こないでよ」

マジ子「生き続ければ幸せになれる、それを証明したら生き延びる、そう言ったわよね。

なのに何よ、まだ約束の時間まであと十四時間もあるわ」

ヘラ「だ、だけど無理じゃない。見たでしょ、さっきのクラスのある子達。先生まで『このクラスにいいものは存在しません』って信じてるのよ。たとえ目の前であたしがあんな目にあっていても」

マジ子「言えはいいいじゃない。手をあげて『私はいじめられてます』って」

ヘラ「言えっこない！」

マジ子「なんで？」

ヘラ「……誰もあたしの味方なんていない」

マジ子「やりもしないで何言ってるのよ」

ヘラ「え？」

マジ子「手もあげないで、声も出さないで、誰か味方になりたくても、ヘラが黙ってたら誰も気づいてくれないよ」

ヘラ「いいの気づかなくても。だってあたしがこの世にサヨナラしなきゃばすべて問題解決。明日から悩むこともなくなるんだから」

風に煽られる梢の音。

マジ子「……なんにも知らないくせに」

ヘラ「なにをよ」

マジ子「この世にサヨナラしたら、今度はあの世があるのよ」

ヘラ「そ、そんなの分かってるわよ」

マジ子「分かってない！」

ヘラ「なによ、自分の役立たずを棚にあげて逆ギレ？」

マジ子「キレちゃ悪い？ 私がどんな気持ちであの交差点で六年の歳月を過ごしてきたと思うの！」

行きかう車。

子供達の笑い声と共に駆け抜ける足音。

マジ子「春も夏も秋も冬も。私のことを置いてけぼりにして時間が流れていく。楽しそうな学校帰りの子供達、家路を急ぐお父さん、買い物袋を下げたお母さん……色んな人があの交差点を通り過ぎていく。でも誰も私がそこで皆を見ていることを知らない。今では私があの場合でこの世にサヨナラしたことも忘れられてくくらいよ」

横断歩道の「通りゃんせ」のメロディ。

マジ子「あのメロディが流れると耳をふさぎなくなる。あの時、確かに歩行者信号は青だったのに。何も起きなければ、雨の中家に帰り着いた私にお母さんがきつとミルクを温めてくれて、おばあちゃん猫のハナが私のミルクを狙って膝に甘えてきて、そうよ、何もなければ明日も明後日もずっと生きていられたのに」

ひび割れたようにメロディが変調していく「通りゃんせ」。

マジ子「……事故現場を見るのがつらいって私の一周忌が済むと家族はこの街に背を向けて引っ越してしまいました。もう誰も私の為に花を供えてくれる人もいない交差点。だけど私は繰り返し繰り返しあのメロディを聞いていなければならぬのよ。ねえ、この世にサヨナラするってことはね、今よりもずっと一人になるってことなのよ！」

遠くで授業終了のチャイムが鳴る。

天使「……授業が終わったみたいね」

マジ子「私の話はまだ終わってない。ねえヘラ」

ヘラ「な、なに」

マジ子「声を出さなければ誰にも伝わらない。でも、もし言葉の通じないところにいたとしたらそれも無理」

ヘラ「……今のあたしのこと？」

マジ子「この場所であたしの言葉が通じないなら、だったら逃げればいい」

天使「ちょっとマジ子、あんたなに言い出すの」

マジ子「いいじゃない、逃げても。どこかにきつとヘラの言葉が通じる人達がいる。だったら逃げればいい。だけどねヘラ、生きることだけは逃げちゃ駄目。生きて生き続けて、そうして私に教えて」

ヘラ「何を……？」

マジ子「生きていれば幸せになれるって」

ヘラ「だってそれは」

マジ子「私にはもう実証できないんだもん。だけどね、これだけは分かるんだ。この世とあの世のどちらを選ぶかって聞かれたら……何があってもこの世にいたいって迷わず答える」

ヘラ「……マジヨ」

鉄扉が開く。

天使「おっとサトケンがようやく追いついたみたいよ」

サトケン「（戸から）お前……そんなところで何を……！」

マジ子「ほらヘラ、サトケンが真っ青な顔してるよ、あんまり心配させないで。あんなイカツイ顔してるけど生徒思いのいい先生なんだから」

走りよる足音。

サトケン「（半泣き）どうした？ なにがあつた？ 先生が聞いてやる、だからな、こっちにおいで」

ヘラ「校長先生……あたし」

サトケン「ほら先生の手をしっかりと握るんだ。いいか、そう、ゆっくりこっちに」

ヘラ「あたしの話、本当に……？」

サトケン「ああ。なんでも言うてみる。だから早くこっちにこい。そらー！」

もつれ倒れる二人。

ヘラ「先生！（泣き出す）」

サトケン「……怖かったな、もう大丈夫だ。うん、大丈夫だぞ、先生がこうやってしつかりお前の手を握ってるんだから」

マジ子(M)「今は校長先生になったと言うけどサトケンはちっとも変わっていません。涙もろくて、暑苦しいくらい生徒思いで。サトケンがヘラを抱えていく背中はずっと昔よりも小さくなったけど、だけどサトケンがいてくれればヘラもきつと」

ヘラ「(呟から)マジョー！」

サトケン「(呟から)おい、どうした急に」

ヘラ「(呟から)先生、ちょっと待ってて」

駆けてくるヘラの足音。

ヘラ「ねえ、マジョ……？ もう行っちゃったの？」

マジ子「ここにいろよ、ヘラの隣」

ヘラ「……見えないよマジョの姿。ううん、マジョだけじゃない、アンジェリーナの大きな翼も見えない。ねえ二人ともどこにいろの？」

天使「良いことデス。もうすぐ私達の声も聞こえなくなりますから」

ヘラ「ねえマジョ、最後に教えて」

マジ子「なあに？ ヘラ」

ヘラ「人間だった時の本当の名前」

マジ子「……正子。まじめなまじめな正子さん」

ヘラ「(笑って)」

天使「だからマジ子。ほんとダサッ」

マジ子「うるさい」

ヘラ「ありがとう、正子さん。あのね、私もね、ヘラじゃなくなって本当は」

鉄扉が大きな音を立てて閉まる。

激しく行きかう車の音。

天使「今日も暇だねえ」

マジ子「暇でなにより」

天使「……あんたさ、次の機会は逃しちゃ駄目よ」

マジ子「え？」

天使「へらに言ってたじゃない。聞きたくもないあのメロディを六年も聞かされてたまんないって」

マジ子「ああ、その事」

天使「たった一人でいるのももう卒業してさ、次の機会には必ず成仏しなさいよ」

マジ子「うん、分かってる」

天使「あんたの分かってるはアテにならないからな」

乗用車が止まる。

ドアが開き、降りてくる軽やかな足音。

へら「(呟) ごめんねママ、ちょっとだけ待ってて」

天使「あら、あの子。あんなに明るい顔して」

マジ子「大きな花束、重そうに抱えてる」

駆け寄ってきた足音。

へら「正子さん、アンジェリーナ、あたし両親とも相談して転校することに決めたの」

天使「ちょっとこっちだつてば。んもうどこ向いてしゃべってんのよ」

マジ子「私達の姿が見えないのは良いことなんですよ？」

天使「それにしたって」

へら「逃げるんだ、あの学校から。だけどね、生きるから。絶対生きることからは逃げないから」

遠慮がちにクラクションが鳴る。

へら「じゃあ、行くね。これ正さんに。なんの花が好きか分からなかったから、ありっ

たけの花包んでもらっちゃった」

マジ子「あたしに……？」

へら「今度の学校ではへらなんて名前じゃなくて、ちゃんと両親がつけてくれた笑美って名前通りに笑えるよう、頑張ってみるから」

去っていく足音。

マジ子「さよなら笑美」

天使「しかし最後までトンチンカンな方むいてしゃべってさ。相変わらず勘の鈍い子だよ

ねえ」

マジ子「(泣いている)」

天使「ちよっとマジ子？」

マジ子「私のための花……何年ぶりだろう」

天使「だーから。さっさと成仏しなさいよ」

マジ子「分かってる」

天使「ああ、もう聞き飽きた、その台詞」

マジ子(M)「アンジェリーナ、私だってあなたの『成仏しなさいよ』はもう聞き飽きました。でもね、こうして笑美からの花束を抱えていると、それとは裏腹の言葉が胸の奥からふつふつと込み上げてきます」

天使「なによー、泣きながらニヤニヤするなんて気持ち悪いじゃない」

マジ子「なんでもないわよ、アンジェリーナ」

天使「あ、今日から私はアンジュにしたから。フランス語で天使。いいわね、アンジュよ、マジ子」

マジ子「ハイハイ、分かりました」

「通りゃんせ」が聞こえてくる。

マジ子(M)「私の名はマジ子。クロスロードの魔女。私がいる限り、この交差点は守り続けてみせる」

了。

アスファルトに花束を

2014年3月16日 発行

著者 時乃真帆

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵

郵便番号 135-0016

東京都江東区東陽1-28-13-401

お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp

サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。